

(便物認可)

尽きない探求の目

「青森の文学世界」

横手 一彦

別論究に仕上げられている。本書の巻頭(同)に、簡潔な所収論文の概略を付す。

山田史生「感想其他 佐藤紅緑『あま玉杯に花つけ』」は、戦前の雑誌『少年倶楽部』(大日本雄弁会講談社)に連載された作品の登場人物の一人、豆腐売り少年・チビ公青木十三(を分析する。その論述を、吉野源三郎「君たちはどう生きるか」(初出1937年新潮社)の袖珍版のよう

本書は、10名の研究者が、青森県出身作家の作品に、「探求の目」(仁平政人)はじめに「をそそいだ一書」である。「探求」は探究となり、それぞれが手堅い個

館田勝弘「陸羯南の文学観念の形成」は、大新聞日本(日本新聞社)に重ねて再考する。その自己形成史への、郷土の教育と郷党

の関わりを指摘する。和歌から短歌への変革であり、今日の広がり

の初めに位置し、その果たした役割は大きい。山田史生「同」。平易だが、重たい言葉である。いまを捉え直す切っ掛けになる。むしろ、10代の人たちに一読をすすめたい。

竹浪直人「葛西善蔵『雪をんな』論」は、先行研究に細心の注意を傾ける。論者が指摘する通り、ラフカディオ・ハーン「雪をんな」と異なる、雪深い津軽地方の雪女伝承に作品成立の材料がある。真冬のホワイトア

ウトの薄闇で遭遇する、赤児を抱いてほしいと願う雪女。それは、確かに津軽の物語である。

森英一「石坂洋次郎『老婆』改訂の意味」に、原典研究の典型をみる。そこに、確かな、動じない、事後検証に揺るがない文学研究の本筋がある。本文の異同を

確認する作業は、地味で、膨大で、根気がいる。言外に、考察はその苦行に始まると教える。

秋田雨雀を論じた尾崎名津子、高木恭造を論じたソロモン・ジョシニア・リ



「探求の目」(仁平政人)は「北の文脈」を読み直す

「をそそいだ一書」は、戦前の雑誌『少年倶楽部』(大日本雄弁会講談社)に連載された作品の登場人物の一人、豆腐売り少年・チビ公青木十三(を分析する。その論述を、吉野源三郎「君たちはどう生きるか」(初出1937年新潮社)の袖珍版のよう

に読んだ。作品論の手順から外れ、いまの直中で漢揺く10代へ、自己の肯定とは？ どう学ぶのか？ と問い掛ける。「自分の頭で考えて自分の生き方を決められること、それが知性である。

秋田雨雀を論じた尾崎名津子、高木恭造を論じたソロモン・ジョシニア・リ

作品の色彩表現を比較した郡千寿子、今官一を論じた仁平政人、三浦哲郎を論じた鈴木愛理、それらの論考にも触れたいが、余裕がない。

「青森の文学世界」は、弘前大学出版会刊、3300円。

異なる山容がかすむ。有限としても、次への「探求」は尽きない。



※この記事は東奥日報社の提供です。
【問合せ先】弘前大学出版会
hupress@hirosaki-u.ac.jp
この画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。